# 有　馬　遺　跡

## 有馬遺跡周辺の地域性

佐　藤　明　人

### 1. は じ め に

有馬遺跡の発掘調査は昭和57年1月から同58年12月までおよそ2年にわたって実施されてきており、現在も継続中である。この間、弥生時代から古代末、中世に至るまで、意義深くかつ多大な資料を得ている。本稿ではその中から畑跡について概要を紹介するとともに、これにともなう問題点を指摘し、若干の考察を加えて見たい。

### 2. 古墳時代畑跡

本遺跡においては古墳時代に降下した火山噴出物が3層確認できる。これ等を古い順にあげると、浅間C軽石、つぎに仮称有馬火山灰、この後に榛名山二ツ岳火山灰とこれにともなう軽石流 (FA・FPF1) となる。FA に続く同じ二ツ岳を給源とする　FP、及び FPF2は確認できない。畑跡は浅間C軽石に覆われたものと FA に覆われたものが検出された。有馬火山灰に覆われたものについては、現在検出されつつある(図2)。

1．有　馬　遺　跡　　2．有馬条里遺跡
3．中　村　遺　跡　　4．空　沢　遺　跡
5．行幸田山遺跡

図1　有馬遺跡と周辺の遺跡

この2つの時期の畑跡はこれまでに県内においていくつか類例を見るが、本遺跡にあっては遺存状態が良く、しかも広域に見られる。特に FA 降下時のものは、FA に直接覆われた上に軽石流が厚く覆っており、遺存状態は往時の再現と言うに値する程である。しかも調査区全域に広がっている。この畑跡の調査結果は古墳時代の農業生産を明らかにする上に少なくない役割を果すと思われる。それは1つに、機能的分析により畑作経営のあり方を具体的に示すものとなろうが、又一方、この畑跡の調査結果はこれと一面異ったところで重要な意義を持っているように思える。それは本地域における畑作の広域性とその古さである。その遡り得るところは、確実なと

ころで古墳時代初頭、高い可能性が考えられるところでは弥生時代後期である。しかもこれが経済基盤の小部分でなく主体的生業としての位置を占めているとするならば、この畑跡の調査の意義はことさら大きなものとなってくるだろう。本稿では、有馬遺跡における畑跡をめぐる問題点を取りあげるについて、前者の畑跡の形態からする機能分析については機会を改めて行うこととして、その形態については簡単に紹介し、後者、いわば畑作文化とその地域性の模索といったところに焦点をあてて稿を進めていきたい。

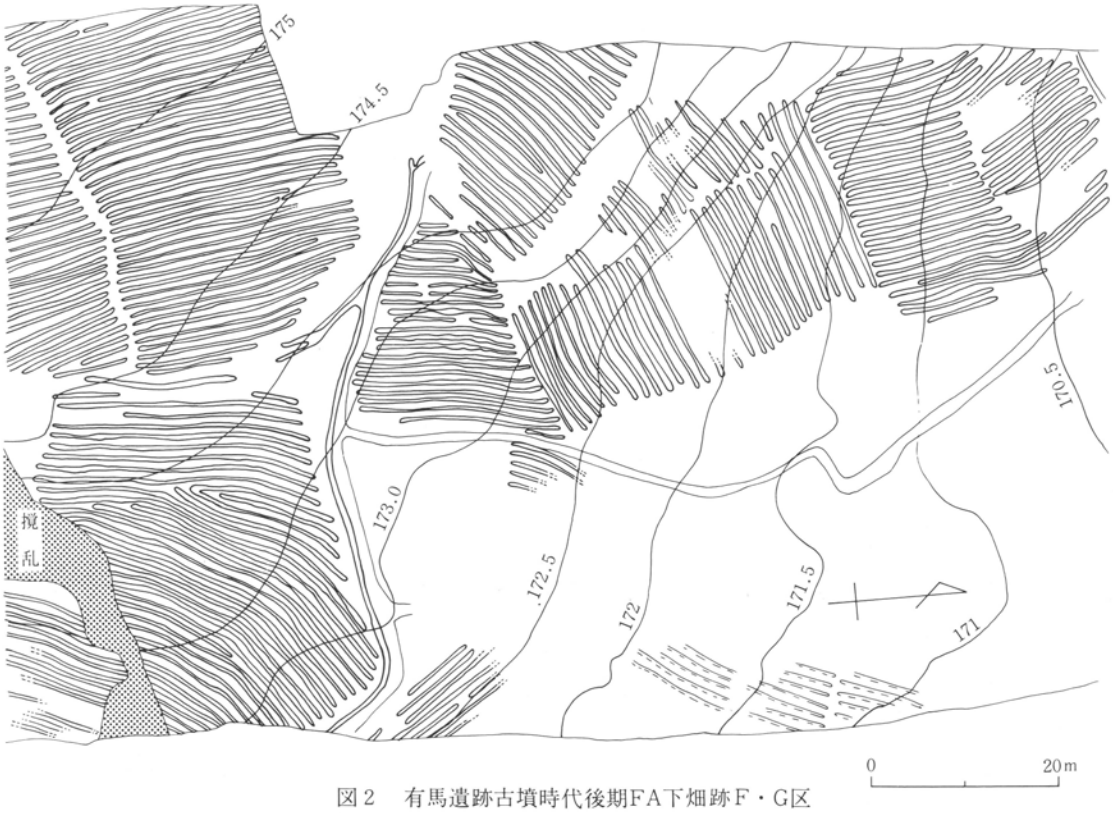


図２　有馬遺跡古墳時代後期FA下畑跡F・G区

本遺跡にて発掘調査された２つの時期の畑跡の形態について、要点に沿い概要を記す。

| | 二ツ岳火山灰層（FA）下の畑跡 | 浅間C軽石層下の畑跡 |
|---|---|---|
| 軽石・火山灰との関係 | FAが畑面を直接覆い、その上に厚さ約1.5mの軽石流が覆っている。 | 浅間C軽石が畝間の溝（サク）内に充塡している。 |
| 遺存状態、及び畑の構成要素 | 一部、流水の浸蝕で流失しているのみである。畝、地割境に道跡、細い溝等を見る。 | 畝間の溝（サク）を検出することができる。上部はFA下畑に削平されている。 |
| 畝の平面規模 | 畝幅（隣接する畝の中心間）は１m。畝の長さ　最長40m、平均20～30m。 | 畝幅　1.4m又は、80cm。 |

| | 二ツ岳火山灰層（FA）下の畑跡 | 浅間C軽石層下の畑跡 |
|---|---|---|
| 畝の断面形状・規模 | かまぼこ状、高いもので20cm、地割単位で高さを異にする。 | サクの断面形U字状　深さ10cm |
| 畝の平面形状 | 畝はやや曲線を描く。随所で枝状に分岐し、あるいは半分ピッチがずれて不連続になる。 | |
| 畝の走向 | 方位に則さない。地面の傾斜方向に近い走向をとるものが多い。 | 方位に則さない。 |
| 耕土 | 暗褐色土。珪酸質の植物繊維体の混入が目立つ箇所がある。耕土は畝のない所にも見られる。 | 不明瞭 |
| 旧いサク痕 | 耕土層下に検出できる。多い場所で３期分の重複がある。方向を同じくし半分ピッチがずれるもの、方向自体を異にするものの重複がある。 | 不明 |
| 地割境の形態 | 幅30～40cm、深さ10～20cmの溝・道状の空地・大溝・方向を異にする畝が直接接する等がある。 | 方向を異にするサクが近接する。 |

### 3.　集落構成と環境

本遺跡の集落占地の状況について見ると、弥生時代後期では遺跡の南半部の高燥な地区から北の低湿地にかけてほぼ一様に礫床墓を中心とした墓群が一帯に見られ、住居群は北の低地に集中する。水田跡や畑跡の確認はない。古墳時代初頭（浅間C軽石降下前後）では弥生時代と同様、北部低地地区に住居群が見られ、これと同時期の畑跡が高燥部から低地にかけて1,000㎡前後の広がりを一単位としながら数箇所に見られる。墓跡は調査区内では見られない。古墳時代後期（FA降下直前）では調査区内北端から南端まで（およそ450m）畑跡が広がり、他の遺構をまったく見ない。この状況から畑跡は弥生時代では軽石等の検出条件がないため確認できなかったが、古墳時代にあってはその占地区域は広く、しかも、初頭から後期にかけて著しい拡大が認められる。

本遺跡の立地するところを現地形の中で見ると、遺跡の南は滝沢川まで比較的平坦な高燥地で、北は午王川に向かい緩い下り傾斜となっている。この地域は一帯に榛名山二ツ岳を給源とする軽石流に厚く覆われ、さらにこの後、その後遺症ともいえる河川氾濫が度々襲い、その堆積物も著しい。遺跡の南部では軽石流1.5mにその後の砂礫層を合わせると畑跡面から現地表まで６～７ｍに達している。調査区内北低地区から以北は現在湧水位が高く、一帯に河原石を充塡した溝を細かく配した暗渠排水施設を設け水田耕作が行われている。この地区における湧水位は渇水期においても古墳時代畑面より0.5～１ｍ高い（図３）。さらに午王川を北にわたっては有馬田圃と称する条里制地割を近年まで良好にとどめていた水田地帯が南北およそ1.5km、東西2.5km、広域に

広がっている。当地一帯は榛名山麓に発達した扇状地面上に刻まれた谷地が二ツ岳軽石流により一旦埋没し、以後現在の浸蝕谷が刻まれていく過程の中で環境は著しく変貌をとげる。とくに北低地部から有馬田圃にかけては、この変貌は一つ地形だけにとどまらず耕地経営に大きくかかわる湧水位の異常な変化をもたらしている。こうした現況の中で二ツ岳爆裂以前の状況を予想することは非常にむずかしい。

しかしこの1、2年、関越自動車道関連の大規模発掘調査がこの有馬田圃の中にも及んでいる。その一つ有馬条里遺跡[1]では、有馬遺跡北低地地区とほぼ同様の状況が認められる。現水田面下には厚い二ツ岳軽石層の堆積があり、この下から有馬遺跡同様の FA 下畑跡の検出を見ている。ただしこの遺跡では FPF 1 による埋没後、その上面に FP 及び FPF 2 に覆われた水田が広域に検出されるといった複雑な様子を見せている。有馬条里遺跡と同じ状況はさらに北に隣接する中村遺跡[2]まで広がっている。ここでも有馬遺跡と同様の FA 下畑跡が見られる。隣接遺跡のこの間の調査結果を合わせ見ると、本地域一帯は二ツ岳爆裂以前広大な畑地帯の広がりがあったと考えられる。それは言いかえれば、畑作を基とする経済活動を行った集団の存在であり、これを背景とする文化、いわば畑作文化の存在である。それではこうした視点のもとに本地域の古墳文化を若干追って見たい。

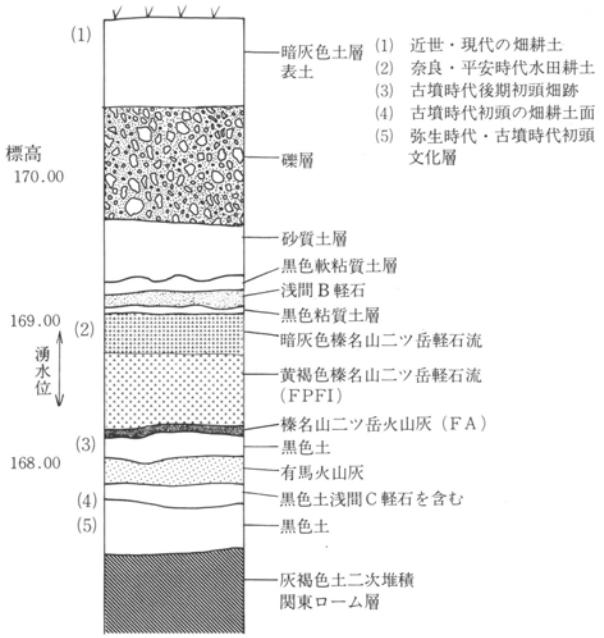


図3　有馬遺跡北低地地区土層断面

| 地点名 | 軽石流の厚さ（FPF 1） | 確認場所 |
|---|---|---|
| A | 1.5m | 有馬遺跡調査区 |
| B | 6 m以上 | 午王川右岸壁 |
| C | なし | 午王川左岸壁 |
| D | 3 m以上 | 調整池工事掘削面 |
| E | なし | 午王川左岸壁 |
| F | 6 m以上 | 午王川右岸壁 |
| G | 1.5m | 午王川左岸壁 |
| H | 4 m以上 | 午王川右岸壁 |
| I | 2 m以上 | 滝沢川右岸工事掘削面 |
| J | なし | 自害沢両岸壁 |
| K | なし | 吉岡川右岸壁 |
| L | なし | 自害沢両岸壁 |
| M | 4 m | 浄水場工事掘削面 |
| N | 1.5m以上 | 滝沢川付近掘削面 |
| O | 1 m以上 | 日枝神社境内掘削面 |
| P | なし（砂礫） | 関越道工事掘削面 |
| Q | 3 m以上 | 同上 |
| R | 2 m以上 | 同上 |

※　FPF 2 については未調査である。

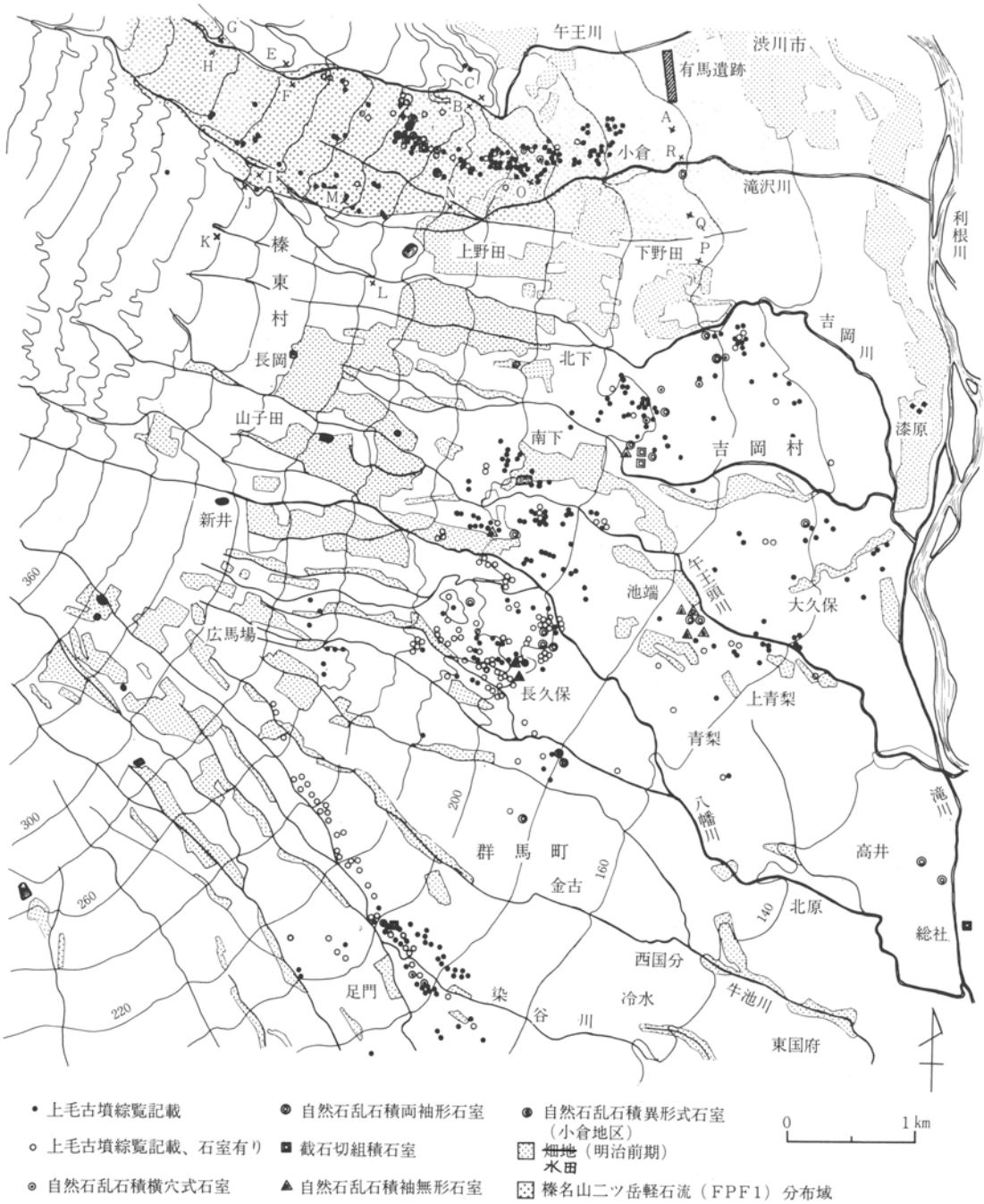


図4　榛名山東南麓古墳分布

## 4.　周辺の弥生・古墳文化

これまでに本地域にあっては、二ツ岳爆裂前後のこの時期の集落調査例は皆無であり、数地点で遺物の出土や、散布の確認を見るにすぎない。古墳調査については群馬大学尾崎研究室により

昭和30年前後より40年にかけて、子持村一伊熊古墳・有瀬1号古墳・有瀬2号古墳、渋川市一坂下町古墳群・東町古墳と一連の調査研究が進められ、さらに近年、渋川市教育委員会により丸山古墳・空沢遺跡・行幸田山遺跡等で多数のこの期の古墳調査が行われている。このうち有瀬1号古墳・有瀬2号古墳・伊熊古墳は二ツ岳軽石層（FP）下の積石塚であり、袖無形横穴式石室を主体部としている。[3] 坂下町古墳群・東町古墳[4]はやはり二ツ岳軽石層（FP）下の積石塚であるが、坂下町古墳群では6基の積石塚からなり、すべて主体部は箱式棺状石室で、東町古墳では4.9m×5.2m方形墳上に2基の石室が設けられ、ともに箱式棺状石室である。丸山古墳[5]は二ツ岳軽石層(FP)下、箱式棺状石室を持つ。空沢遺跡では23基の古墳がすでに調査、報告されている。このうちFA以前ではおよそ径20～30mの円形墳が18基見られ、FP 降下以後では5基のうち4基が横穴式石室を主体部とする積石塚である。[6] ほぼ同一時期の古墳がその周堀をほとんど接する程に近接した状態で群集する傾向を見せている。行幸田山遺跡では古墳時代前期から後期初頭、FA 降下前の古墳が数基調査されている。[7]

以上のうち、空沢遺跡は本遺跡の北西2㎞に所在し、有馬田圃を東に面した榛名山東麓丘陵下、緩傾斜面に占地し、又行幸田山遺跡は本遺跡の西方1.5㎞、やはり有馬田圃を東に見おろす比高60m程の舌状丘陵の先端に占地している。これら両古墳群は有馬遺跡周辺一帯に広がるFA下畑跡と直接の関係が考えられる（図1）。

渋川地域周辺の上記の一連の古墳をめぐっては、尾崎喜左雄博士により横穴式袖無形石室積石塚に関わる墳丘構成要素の分析とその系譜の問題、墳丘と内部施設との関係からの分析等が行われ、[8] 松本浩一氏は丸山古墳を中心に箱式棺状石室の形態分類と、年代的検討を行い、[9] 右島和夫氏は県内の初期横穴式石室の分析を行う中で伊熊・有瀬1号・有瀬2号古墳の構造上の推移、時期について論及し、[10] 又、橋本博文氏は、群馬県地域の積石塚について、その分布傾向、時期、弥生時代の礫槨墓との関係、空沢遺跡（行幸田古墳群）におけるFA降下前の竪穴式系主体部をもつ盛土墳からFP降下後の積石塚への変化の背景等について言及している。[11] 又、梅沢重昭氏は樽式土器文化への石田川式土器の浸透、駆逐による、弥生農耕社会の変質という視点での有馬遺跡の方形周溝墓群の理解の仕方を指摘し、初期古墳のうち円墳（方墳）をもって成立する地域が弥生時代からの伝統的地域であるという傾向に該当するものとして行幸田山1号墳を把えるという考え方を示している。[12]

本遺跡の弥生文化の様相については、梅沢氏が指摘するような石田川式土器文化との関係を示す資料を見ることはできないが、墓制・副葬品・土器様相等において、石田川式土器文化に席巻される高崎北・東周辺部や、又赤城南麓地域とは異質な樽式土器文化を示しており、その分布圏は渋川地域から沼田地域にかかる利根川上流域に広がっているようである。この樽式土器文化圏における基幹的文化構成要素である農耕形態については、これを伺い知ることのできる資料を得ていないが、地勢的に、又有馬地域に見られるような4世紀における畑の普及等から、畑作の可能性を考慮して今後検討を進める必要があるように思われる。

古墳時代前期では行幸田山遺跡の他に墓制に関する資料は見られないが、梅沢氏の指摘のように石田川式土器文化圏に見られるような古墳文化の様相を見ない。後期に至るまでも空沢遺跡に見る小円墳群の採用から離れることはなく、在地性を濃厚に維持し続ける。この一方そのバックグランドでは畑の拡大を見、二ツ岳爆裂期直前には畑作文化の隆盛はその頂点に達する。以後、二ツ岳爆裂期を迎えると盛土墳から積石塚へこの地域の墓制の主流は変質する。橋本氏は盛土の省略「主体部構築にかかる仕事量の増加を墳丘部分の手ぬきで相殺」、「盛土墳の中でも、墳丘の縮少化の傾向」を指摘している。[13] 又、尾崎喜左雄博士は「一般には横穴式石室に竪穴式石室の積土の墳丘と融合し、或はその過渡的な状態の頃……有瀬１号・伊熊の両古墳は積石を以て墳丘を構築する風習を有する人によって持ち込まれた結果と見ることができよう」[14] と述べている。有瀬１号墳・伊熊古墳に見る積石塚築造手法が二ツ岳爆裂期、あるいはその直前、本地域に導入されたと思われるがその異質性の強い古墳文化は拡散することなく、二ツ岳爆裂期及びその復旧期の中で縮小的に導入・維持されていく。この復旧期において環境の変化と結びついて耕地開発、経営は水田志向に大きく転換する。

二ツ岳爆裂以後、終末期への経過は、積石塚の消滅過程を示す資料は明らかでなく、文化の継続的把握はできないが終末期的様相の濃い群集墳を小倉地区に見る。その中心は堂山古墳群と称し、二ツ岳軽石流上に径10m前後の小円墳が群在している。昭和10年の調査にもとづき編纂になる上毛古墳綜覧中172基を数える。古墳群の中には石室が開口しているものを９基見る。これまで発掘調査が行われた例は皆無であり、これらの古墳の石室構造把握は十分に行えない。開口しているものについて現状での観察では、截石切組積石室１基、自然石乱石積横穴式石室３基、異形式の乱石積石室５基を見る。截石切組積石室を持つ古墳は綜覧、明治村第190号で墳丘径15m、円墳状をなすが遺存状態は悪く正確にはわからない。石室は前部を欠損しているが、規模は長さ２m以上、幅1.52mを測る。石材は角閃石安山岩で精致な作りである。本古墳群中特に注目されるものに、異形式の石室を有する古墳がある。綜覧・明治村第283号はこの形式の古墳で自然石乱石積、石室の規模は高さ、奥壁部で1.2m（推定）・長さ2.1m・前幅82cm・奥幅93cm・中央部最大幅1.2mを測る。小規模で著しい胴張形状を示す。特に注目させられるのは石室前部の形態である。袖は目立たず、開口部のマグサ石は幅45cm・厚さ17cmの石材を平積に用いている。現在この石の上部から天井石まで50cm開口しているが（盗掘口？）同様の石材で閉塞されていたと思われる。この石の下は未掘状態なので正確なところは不明だが、床面まで90cm前後の間隙を持つ。マグサ石の下端から天井石までは約１mであり、後者の高さが目立つ。又天井石、奥壁とも石材が小振りであるのも特徴と言える。綜覧・古巻村第15号では石室形状・規模は明治村第283号とほぼ同様であり、玄門部上には幅40cmと54cmの２枚の石を平積に積み上げ壁面を構成している。下方の石（マグサ石）の下は床面との間が未掘であるので正確には計測できないが65cm前後が予想される（写真図版）。羨道部は不明である。本古墳群中この形式の石室を持つ古墳は５基を数えるが、ほぼ同様の形態を示しており、一定の定形化された形式と見ることができるようである。

本古墳群にあってはその観察ができ得るものは全体の中のほんの一部にすぎないが、これ等を見るかぎり全体的に、終末期的様相が強く認められる一方、前記のごとく群馬県地域において特異な石室形式を採用していることに地域性を見ることができる。終末期における群小古墳群の形成や虚空蔵塚古墳や前記明治村190号など、截石切組積石室の採用等在地性の払拭傾向にあるものの、終始前方後円墳などの大型古墳を見ないことや、異形式石室の普及などに文化的特異性の継承を見ることができる。

この小倉地域の古墳群について尾崎喜左雄博士は古墳を築造せしめたこの地域の総人口について、支配・被支配階級の検討を行う中で推論をこころみ「古墳が地域の広さに比して多数存在」すること。「生産地域が甚だ狭小にすぎ、且つ、小倉地域には水田は甚だとぼしい」ことを指摘し、「古墳を作った階級は豪族、或は支配階級のみと断定してしまうわけにはいかない」、「古墳の群在する地帯の人口は、相当数にのぼっていたものである[15]」と述べている。

有馬遺跡、有馬条里遺跡に見る古墳時代終末以後平安期の集落の規模の大きさ、周辺一帯の濃密なこの期の遺物包蔵状態はこのことを裏づけている。この古墳群のバックグランドは小倉地区周辺だけでなく、有馬田圃を含めた広域な地域を考える必要があろう。有馬田圃付近には近年まで一帯に条里制区画を良好な状態で見ることができた。その周辺には平安末期編纂になる上野国神明帳に集録される有馬渠口神社・有馬御鍬神社・有馬堰口神社等[16]、水田経営に対する積極志向を伺わせる事物が多い。度々の自然災害に見舞われながらも積極的な耕地経営を進め、地域振興をはかった姿をここに見ることが出来る。

### 5. 榛名山東南麓の4地域

榛名山東南麓地帯は地勢的・文化的に大きく4地域に把えることができると思われる。地質について新井房夫博士の見解を引けば、中部ローム期から上部ローム期にかかる時期「過去の利根川は、やがて渋川付近を扇頂とし、(赤城・榛名) 両火山の山麓末端をそれぞれ北東限および南西限として南に開く大規模な扇状地を形成していった。」、「洪積世後期のある時期に至り……前橋砂礫層からなっていた古期扇状地面の一帯は瞬時に厚さ10数メートルもある火山泥流推稚物 (前橋泥流) の下に埋没してしまった。」「前橋台地原面」が出現し、「一時的にそれまであった排水系が消失」し、「湿潤地があらわれ」、利根川両岸の「火山灰質シルト」が形成される。ただし「清里地域では、このころ榛名火山から供給された新期の火砕流や土石流などの堆積がひきつづいて行われ、現在見られるような緩傾面地形をつくり上げ……湿地性の環境からは比較的早く解放」される[17]。

以上の見解を基本にし4地域の地質について現地勢と合わせ整理するなら、①渋川地域、特に有馬地区では洪積世末期の榛名系小河川の扇状地形成と前記利根川系扇状地が複雑に入り組んでいる。地勢、文化については前述のとおりである。②榛名東南麓下位帯(標高150m以下)高崎北・東地域、前記利根川両岸地帯、勾配は緩く自然堤防・後背湿地が形成されている。③中位帯、(標

高150～200m）吉岡村・群馬町、及び前記清里地区、勾配は比較的強く河岸段丘が形成され、河床は比較的深い。④上位帯（標高200～300m）勾配は強く湧水地が点在する。

### 6. 吉岡村・群馬町地域

この地質、地勢上の4地域は歴史的、文化的地域でもある。このうち渋川地域については前述したが、吉岡村・群馬町地域は、ここも又畑作との関わりで興味深いところである。この地域は地勢的に水田に適さないところであり、現在一帯に畑地が広がっている。図5は明治前期の状況であり、現在の広域農業用水導入以前の状況である。およそ95%が畑地である。又この地域は古墳分布が密なところで知られているところであり、上毛古墳綜覧上では旧駒寄村（吉岡村）から金古町まで688基の古墳を数えることが出来る。又近年関越自動車道や圃場整備事業関連でこの地域の各所で発掘調査が進み、比較的大規模な古代集落の検出が相次いでいる。こうしたことからこの地域には古くから畑作を基とした文化の興隆があったことが予想される。

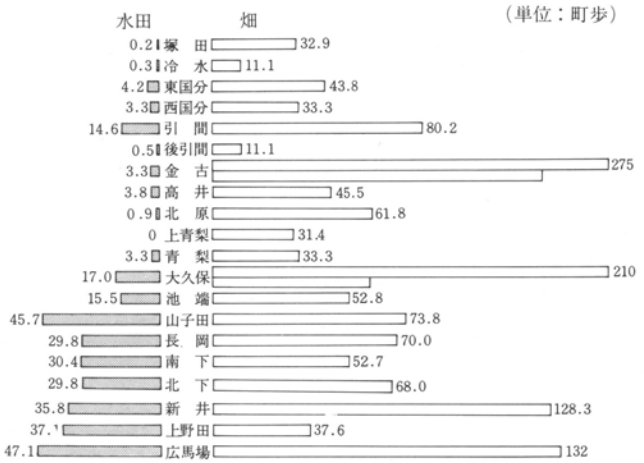

図5　旧村別田畑面積比較

この地域の地勢について遡及し、検討するなら、染谷川・牛池川は現在河床がそれぞれ9m・8m東国府付近で下がり、比較的幅広の段丘下より古代以前の遺構の検出を見ている。現在の河床レベルは古代においてもほぼ変化がないと思われる。[18] 八幡川は北原付近で河岸段丘が発達し、河床は低い。現在段丘下の河川敷は比較的広く、ここには狭長な水田が帯状に作られている。又この付近は旧河道が複雑に入り込んでおり、現在部分的に段丘上にも湿地の形成があり、[19] 北原B遺跡では八幡川右岸段丘上に小規模な古墳時代水田跡を検出している。[20] 午王頭川においては陣場付近までは河岸段丘の発達があり、ここでも八幡川同様段丘下に水田が作られているが、より下流の上青梨子付近では河床は周辺の畑より1.5m程下がるだけで、川の両側には高さ1.5m程の堤防を設け河川管理を行っている。吉岡川・駒寄川を含めこの地域の小河川は絶対的に水量が少ない。このため、広域な水田経営は不可能である。南下においては比較的広域な水田を見るが、これは近世に開削を見た大藪溜池（東西102m・南北79m）によるものである。[21] これまでの発掘調査においても、北原遺跡におけるような古代水田跡の存在は例外であり、畑跡はあっても水田跡の存在を見ない。

しかし、こういった環境の中にあって、比較的大規模な古代集落の検出が最近の発掘調査によ

り続出している。関越自動車道関連では大久保A遺跡・大久保B遺跡・七日市遺跡・北原遺跡・下東西遺跡・国分境遺跡・国分寺中間地域遺跡、圃場整備関連では清里・陣場遺跡など各遺跡で古墳時代後期後半から平安時代にかかる住居群が数10軒から数100軒規模で発掘調査されている。(22)

一方この地域は北から、大久保古墳群・南下古墳群・長久保古墳群・金古内林古墳群・庚申古墳群等、濃密な古墳分布が見られる。図4は上毛古墳綜覧に記載されたものと、これにもとづき踏査し、石室の存在が確められたものを示した。これらの古墳はほとんどが小円墳で洪積世末期に形成された〝流れ山〟と称する泥流丘上に占地している。このため石室の存在が確められないものについては古墳としての確認は仲々むずかしい。古墳綜覧においても石室の確認があったものについては信頼がおけるが、以外のものは古墳として不確実である。しかし、各古墳群において総体としての数は大幅には変動しないと思われる。古墳形式については竪穴式石室の確認は皆無であり、これまでに確認されたものはすべて横穴式石室である。墳形は大久保古墳群、及び金古内林古墳群等において前方後円墳らしい形状を示すものがあるが明確ではない。ただ長久保古墳群の最上位の丘陵上に占地する高塚古墳は全長60m二段築造の前方後円墳であり、内部構造は全長10m前後の両袖形横穴式石室である。石室構造・ハニワ・須恵器・使用尺度・二ツ岳軽石（FP）などとの関係から西暦6世紀後半と推定されている。(23) 高塚古墳は現時点ではこの地域の最古段階の古墳であり、しかも首長クラスの被葬者を想定することができる。この地域の大方を占める群小古墳の内部構造については袖無形乱石積・両袖形乱石積・截石切組積と大きく分けられるがそれぞれの中にも狭長袖無形や幅広のもの、両袖形にあっても大久保・南下古墳群では切石の玄門が目立ち、一部に切組手法を見るもの（南下B号）等多様な要素を含んでいる。時期的問題についてはこれを単純に序列とすることはできないが、これまでの年代観を当てるなら袖無形石室古墳を6世紀後半より7世紀初頭、截石切組積石室墳を7世紀末から8世紀初頭とし、両袖形乱石積石室墳についてはこの間に置くのが妥当と思われる。(24)

一方前記集落遺跡の調査では古墳時代後期初頭以前（石田川・和泉・鬼高Ⅰ期）の遺構の検出例は非常に少なく、後期後半（鬼高Ⅱ～Ⅲ期）以後集落形成が本格化するようである。上記古墳群のバックグランドをこの古代集落とその近隣地域に求めてもおよそ矛盾をきたすことはないと思われる。

榛名山二ツ岳火山灰（FA）に覆われた畑は有馬遺跡の他、芦田貝戸遺跡(25)・鳥羽遺跡(26)・国分寺中間地域遺跡(27)・熊野堂遺跡第Ⅰ地区(28)（東下井出遺跡）等で検出されている。これ等の遺跡は吉岡村・群馬町地域の縁辺部に所在するものであり、その中央部においては二ツ岳火山灰層が一様に見られ、この期の畑跡検出の好条件下にありながら今もって発見されていない。

この地域の古墳群・古代集落跡の経済基盤については、その周辺での畑作にこれを求めることができようが、その生長・開花期は古墳時代後期後半と考えるのが妥当のようである。以後、奈良・平安期＝律令期にあっても畑作を基とする経済活動は維持・拡大され続けていったと思われる。

## 7. 後　記

以上、有馬遺跡周辺の地域性について、いわば畑作文化の模索といったところに焦点をあてて稿を進めてきた。榛名山東南麓にあっては、これら畑作に関わりの深い地域の他、榛東村を中心とする山麓上位帯では水稲耕作が中心的に行われてきており、又山麓下位帯である高崎北・東地域では水稲耕作を基とした文化が弥生時代以後連綿と、しかも隆盛に今日まで続いてきている。これらの地域の歴史、文化の形成及びその広がりはその時期、時期の時代背景に応じた在地の伝統、他地域との系統的つながりの中で行われようが、こうした中にあって基幹的文化構成要素である農耕形態とその動向を考慮の上でその理解を進めるといった地域研究の方法は今後さらにその意義を深めていくと思う。古代の生産遺跡の調査を可能にする条件を持ち得る群馬県地域にあっては、この研究方法が可能であるだけにその任を負わなければならないと筆者自身、いま思っている次第である。なお榛名東南麓地帯の軽石流、古墳分布調査はここ一年以上にわたり休日を利用して行われてきた。本稿はその中間結果報告の趣旨をも持っている。この分布調査は群馬県埋蔵文化財調査事業団職員仲間である友廣哲也、大西雅広、須田努諸氏と共同で行ったものである。又図版作成にあたっては新井悦子氏の協力があった。

**註**

(1) 巾隆之ほか「有馬条里遺跡」『年報２』㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1982
(2) 横沢克明氏よりご教示
(3) 尾崎喜左雄「古墳文化」『北群馬渋川の歴史』　1971
(4) 前掲(3)に同じ。坂下町古墳群では、「粘土層」が「墳丘の石の間にあり」、これを FA とする意見もある。
(5) 松本浩一、石塚久則『丸山古墳発掘調査報告書』渋川市教育委員会　1978
(6) 大塚昌彦、小林良光『空沢遺跡（第３次）』渋川市教育委員会　1982
(7) 大塚昌彦氏よりご教示
(8) 前掲(3)に同じ　(9) 前掲(5)に同じ
(10) 右島和夫「群馬県における初期横穴式石室」『古文化談叢』第12集　1983
(11) 橋本博文「上野の積石塚」山梨県考古学協会第４回総会研究発表要旨　1983
(12) 梅沢重昭「1982年の動向―群馬県」『考古学ジャーナル』　№218　1983
(13) 前掲(11)に同じ
(14) 尾崎喜左雄「群馬県発見の積石塚」『信濃』第13巻第１号　1961
(15) 尾崎喜左雄「伊香保神社の研究―氏族の神」『上野国信仰と文化』　1970
(16) 有馬渠口神社は現存、『上野国郡村誌(6)―有馬村』では八幡社を有馬御鍬神社に、諏訪社を有馬堰口神社にあてている。
(17) 新井房夫「地形　地質」『前橋市史』第１巻　1971
(18) 国分寺中間地域Ⅰ遺跡、及びⅡ遺跡の調査で確められる。中間地域Ⅰ遺跡の調査には筆者も参加した。石井克己ほか「国分寺中間地域Ⅱ遺跡」『年報１』㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1982
(19) 国分境遺跡の試掘調査時、主要地方道箕郷線付近で湧水位が高く、湿地の広がりを筆者が確認。
(20) 鬼形芳夫ほか『群馬町埋蔵文化財発掘調査報告第５集―北原遺跡』群馬町教育委員会　1983
(21) 『上野国郡村誌(6)―南下村』監修　萩原進　1981　原本は明治９年編纂
(22) 中沢悟ほか『清里・陣場遺跡』㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1981
吉岡村教育委員会『大久保Ａ遺跡の調査２』1982
㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団『年報』１、1981『年報』２　1982など
(23) 石川正之助「高塚古墳」『群馬県史―資料編３―原始古代３』　1981
(24) 尾崎喜左雄『横穴式古墳の研究』1966　石川正之助『いわゆる「截石切組積石室」へのアプローチ』『群馬文化』　143号　1973　坂本和俊「袖無型横穴式石室の検討」原始古代社会研究５　1979　右島和夫前掲(8)及び「南下Ａ号古墳」、「南下Ｄ号古墳」、「南下Ｅ号古墳」『群馬県史資料編３―原始古代３』1981等による。
(25) 田村孝ほか『高崎市文化財調査報告　第19集―芦田貝戸遺跡Ⅱ』高崎市教育委員会　1980
(26) 鳥羽遺跡現地説明会資料　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1982
(27) 木津博明「国分寺中間地域Ⅰ遺跡」『埋文月報』９月号　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1981
(28) 飯塚卓二ほか「熊野堂遺跡第１地区（東下井出遺跡）」『年報２』㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1982